

## 教職員情報

## 理学部附属 植物園のいきものたち 第21回



▲写真1

立春をむかえ冬もおわりに近づいてきました。注意深くみると、そこそこに春の気配を感じられます。今月はツバキ(椿)を紹介します。

ツバキ(*Camellia japonica*)はツバキ科ツバキ属というグループに属し、京都市周辺にもごく普通に自生します。日本の自生種としてサザンカ(*C. sasanqua*)やツバキの亜種とされるユキツバキ(*C. japonica* subsp. *rusticana*)があります。2003年11月号で紹介した中国原産のチャ(*C. sinensis*)も同じくツバキ属とされています。

日本に自生するツバキ属は2種のみですが、ヒマラヤを含め東アジア、東南アジアに多くの種が分布しています。植物園内にも、サルウインツバキなど何種かが植えられていましたが、不幸にも枯れてしまったものもあるとされ、園内での生育状況の再記録が求められているといえます。

植物園には自生種のツバキ(ヤブツバキ)やサザンカにくわえて、数多くの園芸品種が集められ、ツバキ科ゾーンを形成しています。ここには今年1月下旬に咲いていた「侘助」のひとつ(写真1)と「初嵐」(白玉椿、写真2)を紹介합니다。ツバキの園芸品種の作出は、室町時代より発展し江戸末期に訪れたシーボルトらを驚かせたといわれています。八重咲き、千重咲きなど主に花の形が改良されていますが、植物園ではこれらが集められているので、早咲き・遅咲き、一斉開花・順次開花といった、形以外の性質も比べることができます。

自生のツバキは、秋から冬、そして春にかけて咲き続けます。冬の間も咲き続けることは、真っ赤な花弁の色と同じくらい重要な性質です。餌が少ない冬、赤い花弁を目印にメジロやヒヨドリなどの鳥たちが蜜を吸いにやってくるのです。この蜜は人間にも甘いほどの糖分を含み、蜜を吸う鳥の頭や体に付着した花粉が花から花へと媒介されるのです。このような鳥媒花は日本には数えるほどしかありません。



▲写真2

ツバキの利用法として「椿油」が有名です。しかし、実際に使った、種子を絞って作った、という体験をもつひとは多くないでしょう。筆者自身、種子を観察した事はあっても油を絞ったことはありません。そのかわりに、ツバキの天ぷらを作ってみましたので紹介しておきます(写真3)。コツは良く揚げるだけ、というのですが色合いの良い肴としてなかなか好評でした。



▲写真3

撮影および解説 今村彰生  
(大学共同利用機関法人 総合地球環境学研究所 非常勤研究員)